

### 3 - 3 実施イベント記録

#### (1) 「阿蘇草原フォーラム 2000 - 野焼き・輪地切りのあり方を探る」

地元農業・畜産関係者、地域内及び都市住民との合意形成に向けたイベントとして、平成12年9月23～24日の2日間にわたり、「阿蘇草原フォーラム 2000 - 野焼き・輪地切りのあり方を探る」を開催した。イベント開催概要は以下のとおりである。

#### 「阿蘇草原フォーラム 2000 - 野焼き・輪地切りのあり方を探る」全体概要

##### 開催趣旨：

阿蘇の草原は国民共有の大切な資産、との認識が広まりつつあるが、近年の畜産業の低迷などにより、この草原の維持が困難になってきている。さらに今後地元人口の減少が予測されるなかで、草原保全に向けた新しい野焼き・輪地切りのしくみづくりが緊急の課題になっている。そこで、地元牧野組合関係者・野焼き支援ボランティア関係者及び行政関係者など様々な関係者が集い、こうした課題について検討し、新しい技術・システムを探るものである。

開催日時： 平成12年9月23日（土）～24日（日）

フォーラム：9月23日（土）14:00～19:00 / 19:30～21:00

公開輪地切り実演・実証試験：平成12年9月24日（日）9:00～13:30

場 所：阿蘇郡一の宮町国立阿蘇青年の家、阿蘇郡一の宮町木落牧場

主 催：(財)阿蘇グリーンストック・阿蘇郡町村会・熊本県阿蘇地域振興局・  
環境庁自然保護局九州地区自然保

護事務所

後援・協賛：農林水産省九州農政局・阿蘇地域農業振興協議会・熊本日日新聞社・  
くまもと楽座評定会・西日本新聞社・朝日新聞社・読売新聞社・毎日新聞社・NHK熊本放送局・熊本放送・テレビ熊本・熊本県民テレビ・エフエム中九州・熊本朝日放送・熊本シティエフエム

#### 【参加者数】

フォーラム 総数：130名

(内訳)	地元牧野組合関係者	: 20名
	ボランティア	: 60名
	行政関係者	: 30名
	その他(主催者・スタッフ)	: 20名

公開輪地切り実演・実証試験参加者数 総数：150名

(内訳)	地元牧野組合関係者	: 30名
	ボランティア	: 90名
	行政関係者	: 10名
	その他(主催者・スタッフ)	: 20名

## フォーラム開催プログラム

- 13:00～13:50 支援ボランティア初心者研修会
- 14:00～14:20 開会式  
主催者あいさつ：阿蘇郡町村会長・(財)阿蘇グリーンストック理事長 河崎敦夫  
来賓あいさつ：環境庁自然保護局国立公園課長 田部 和博
- 14:20～16:20 第1部 野焼き・輪地切りのあり方を考える  
基調報告 「野焼き・輪地切りのあり方・システムについて」  
(財)阿蘇グリーンストック常務理事 久保田一郎  
問題提起  
・地元牧野組合よりの発言/田上安盛(高森町村山区長)、河野正純(南小国町中湯田牧野代表)  
・野焼き支援ボランティアよりの発言/福田俊英(南関町)、牛島洋太郎(基山町)  
・行政関係者よりの発言/宇藤 晃 白水村振興課長、山村将護 高森町農林振興課長  
討 論
- 16:20～17:00 休 憩(青年の家講堂前の草原においてラジコン草刈り機実演)
- 17:00～19:00 第2部 輪地切り省力化新技術の確立に向けて  
基調報告「草原景観保全と輪地切り省力化への取り組み」  
・環境庁自然保護局九州地区自然保護事務所長 国安俊夫  
事例報告「これまでの輪地切り省力化技術」  
・安藤吉孝(高森町農林振興課農林振興係主事)、小坂今朝和(阿蘇町赤水牧野組合長  
パネルディスカッション「省力化技術確立へ向けての可能性と課題」  
・コーディネーター/大滝典雄(元熊本県立農業大学校附属畜産高等研修所長)  
・パネリスト/山本嘉人(農林水産省九州農業試験場草地管理研究室主任研究官)  
園田 盡(一の宮町木落牧野組合長)、山内康二(阿蘇グリーンストック専務理事)、鹿野久男(自然環境研究センター専務理事)
- 19:00 閉 会
- 19:30～21:00 交流会 (阿蘇青年の家講堂にて/立食)

## 公開輪地切り実演・実証試験プログラム

- 9:00～ 開会・オリエンテーション  
あいさつ 開催者側：環境庁自然保護局九州地区自然保護事務所 国安所長  
(財)阿蘇グリーンストック 山内専務理事  
開催牧野：木落牧野組合 園田組合長  
来 賓：農林水産省九州農政局 高野農政部長  
試験内容についての概要の説明、見学要領の説明/全体の注意事項
- 10:00～11:30 公開輪地切り実演実証試験  
機械刈りの各試験地における実証試験の実施  
ボランティアによる輪地切り実演実施
- 11:50～12:30 論評会  
輪地切り省力化実証試験の概況報告  
試験全体の講評：大滝委員  
実施牧野(木落牧野)組合の感想：園田牧野組合長より  
参加者の感想  
とりまとめ：環境庁九州地区自然保護事務所 国安所長
- 12:30～13:30 交流会 (赤牛バーベキュー)

## 【第1日目：フォーラム議事概要】

### 第1部「野焼き・輪地切りのあり方を考える」

草原保全のため、野焼き・輪地切りの新しいあり方・しくみについて地元牧野組合関係者・支援ボランティア関係者及び行政関係者などが一堂に会し、方向性と問題点を探った。

### 基調報告 「野焼き・輪地切りのあり方・システムについて」

(財)阿蘇グリーンストック常務理事である久保田一郎氏による基調報告では、畜産農家のみならず、地元の人々、更に九州の多くの人々が草原からの恩恵を受けており、草原保全については、国民が応分に負担・参加できる仕組みをつくる必要がある。また、野焼き支援ボランティアが参加しやすいようなシステムづくりの必要性、さらに、土地利用計画の策定、牧草の活用による畜産の振興策の検討の必要性などの提言があった。

### 問題提起

- \* 地元牧野組合より：有畜農家の減少によりボランティアを受け入れ野焼きを実施している状況について、ボランティアとの交流を牧野の新しい利活用につなげたい、あか牛の消費拡大を図る必要がある、などの発言があった。
- \* 野焼き支援ボランティアより：野焼きに参加して「ハラハラ・ワクワク・ドキドキ・爽快」と感じた経験や、1人の小さな力も集まれば大きな力になるため、もっと情報発信をする必要があるという発言があった。
- \* 行政関係者より：傾斜が厳しいためボランティアを断っているという牧野の状況や、ボランティアにはいろいろな可能性があり、阿蘇の野の花を守るためにも草原を守ってほしいという発言があった。
- \* 参加者より：地球的観点から草原保全を考えるべき、土地利用の面から輪地切りの省力化を図ることが必要、野焼きの役割分担とリーダー養成が必要などの意見があった。また、ボランティア参加により非常に助かっている牧野の状況、赤牛産直の状況などの報告があった。

### まとめ

食糧危機が進行している中で、阿蘇は日本の肉用牛の生産基地としての可能性がある。ボランティアについてはリーダー養成計画に対応して受け入れ体制の検討とともに、ボランティアが何をどこまでやるのか見えるようにしていく必要がある。

阿蘇の草原保全の取り組みは、人と自然、都市と農村(地元)との共生に向けた課題であり、都市からのボランティアによって野焼きを支援出来るような仕組みをつくる必要がある。

地元の方々が営々として努力されてきた野焼き・輪地切りであり、本日の提起や多くの貴重な発言を今後の野焼き・輪地切りのあり方、システムに生かしていきたい。

## 第2部 「輪地切り省力化新技術の確立に向けて」

草原景観維持の上で輪地切り省力化への取り組みが重要であることを確認し、これまで試行されてきた省力化技術を振り返りながら、新技術の可能性やインフラ整備など今後の課題について検討した。

### 基調報告 「草原景観保全と輪地切り省力化への取り組み」

環境庁自然保護局九州地区事務所の国安俊夫所長より、平成12～13年度「国立公園内草原景観維持モデル事業」及び事業の一環としてのフォーラム開催についての報告があった。

### 事例報告 「これまでの輪地切り省力化技術」

#### 「高森町における輪地切り省力化の試み」

安藤吉孝氏より、高森町における野焼き継続に向けての取り組み状況の報告とともに、今後の課題として、ボランティアの受け入れ体制を整え、野焼きをスムーズに、事故のないように進めていくこと、また、急傾斜地の半恒久的防火帯としてヒノキの植林が提案された。

#### 「赤水牧野組合のグリーンベルト造成」

赤水牧野組合長の小坂今朝和氏より、野焼き・輪地切りの状況、グリーンベルト造成実績について報告があった。また、造成や牧野管理について立地条件による問題点や、有畜農家の減少に対応した輪地切り省力化に向けてへの取り組みや考え方が示された。

### パネルディスカッション「輪地切り省力化技術確立に向けての可能性と課題」

#### <パネリストよりの発言>

- 園田 盡氏より木落牧場の概況報告とともに、野焼き・輪地切りの実施状況、グリーンベルト造成の問題点と効果について現場からの報告があった。また、おいしい赤牛を食べてほしい「それが草原を守っていくことになる」ということがアピールされた。
- 山本嘉人氏からは、山羊の放牧による傾斜地での防火帯づくりの試みが紹介された。放牧の結果、草の量の減少から山羊を用いた防火帯づくりは可能であるという考察に加え、山羊の放牧による利点や課題が示された。
- 山内康二氏より、野焼き支援ボランティアの受け入れに関する（財）阿蘇グリーンストックの活動状況の報告とともに、今後の受け入れに関する条件整備やしきみづくり、さらに運営に関する課題が示された。
- 鹿野久男氏より、平成12～13年度の環境庁の調査についての方向性、また、24日に木落牧野で行う実証試験の内容について報告された。

#### <会場からの意見>

- 輪地切り省力化に向け、急傾斜地では秋遅くまで放牧をして草の密度を下げ野焼きをしているという報告があった。一方では、好ましくないというのは承知の上で除草剤利用まで考えざるを得ない状況にあるという困難さも報告された。
- グリーンベルト造成に関しては、トラクターが走れる位の道を作り、そこに牧草を播いて適切な施肥管理・機械管理をすれば成功する、また、グリーンベルトを防火帯

としてだけで捉えず、多目的、多角的に考えた方がいいのではないか、とう意見があった。

- 阿蘇自身が持つ様々な面を生かして情報発信していくことが必要、また、ボランティアの活動範囲を明確にするためにも、総合計画を策定して欲しいという意見があった。

#### 【第2日目：ボランティアによる輪地切り実演・研修について】

- アンケート調査結果より

##### 参加ボランティアの意見

- 輪地切り作業は大変危険で重労働であると感じている人がほとんどで、そのために事前の十分な説明や周囲への気配りが必要であるという意見が多い。
- 今回の実演・研修への参加により、輪地切りが草原維持のために必要であることが認識できたという回答がほとんどであった。
- 参加するにあたって、スケジュールの早めの確保やHP等での情報提供を望む意見が多かった。また、道具の準備や集合場所の明記、当日の指揮・命令系統の明確化、牧野組合とボランティア間等の連携・協力体制の強化を望む意見が多くみられる。

##### 牧野組合員・行政の意見

- ボランティアの真面目に取り組む姿に感心する意見がある一方で、「草刈り機の練習をしてきてほしい」「真剣に草刈りをする気持ちを持ってほしい」という意見もある。
- ボランティアを受け入れる場合の必要な条件については、「派遣側でボランティアに対する保険に加入」が約9割で最も多く、次いで「決まったメンバーが毎年来てくれる」が6割強、「ボランティアの事前研修」「組合・ボランティア間の連絡調整等に行政が関与」が半数以上となっている。

( 2 ) 牧野組合・地元関係機関との意見交換

草原保全への取り組みの前提として地域住民と都市住民との間の合意形成だけではなく、まず、地域内での合意形成が重要であるとの認識から、平成 13 年度は牧野組合、行政や関係機関の担当者との意見交換に重点を置いて検討を進めた。

牧野組合を中心とした意見交換としては、阿蘇地域振興局農業振興課主催の「第 1 回 牧野組合長連絡会議」における意見交換を手始めに、「モーモー輪地実証試験中間報告会」、「草原が持つ様々な価値の活かし方を考える会」と 3 回の会合を設けた。また、(財)阿蘇地域振興デザインセンター主催の「阿蘇地域デザイン研究会」では町村担当者との意見交換を行った。

開催にあたっては、極力広く参加を呼びかけ、開催後は参加しなかった関係者にもその内容の報告・周知に努めた。各会合においては、アンケートや実証試験など実施事業の成果を報告するとともに、活発な意見交換が行われた。

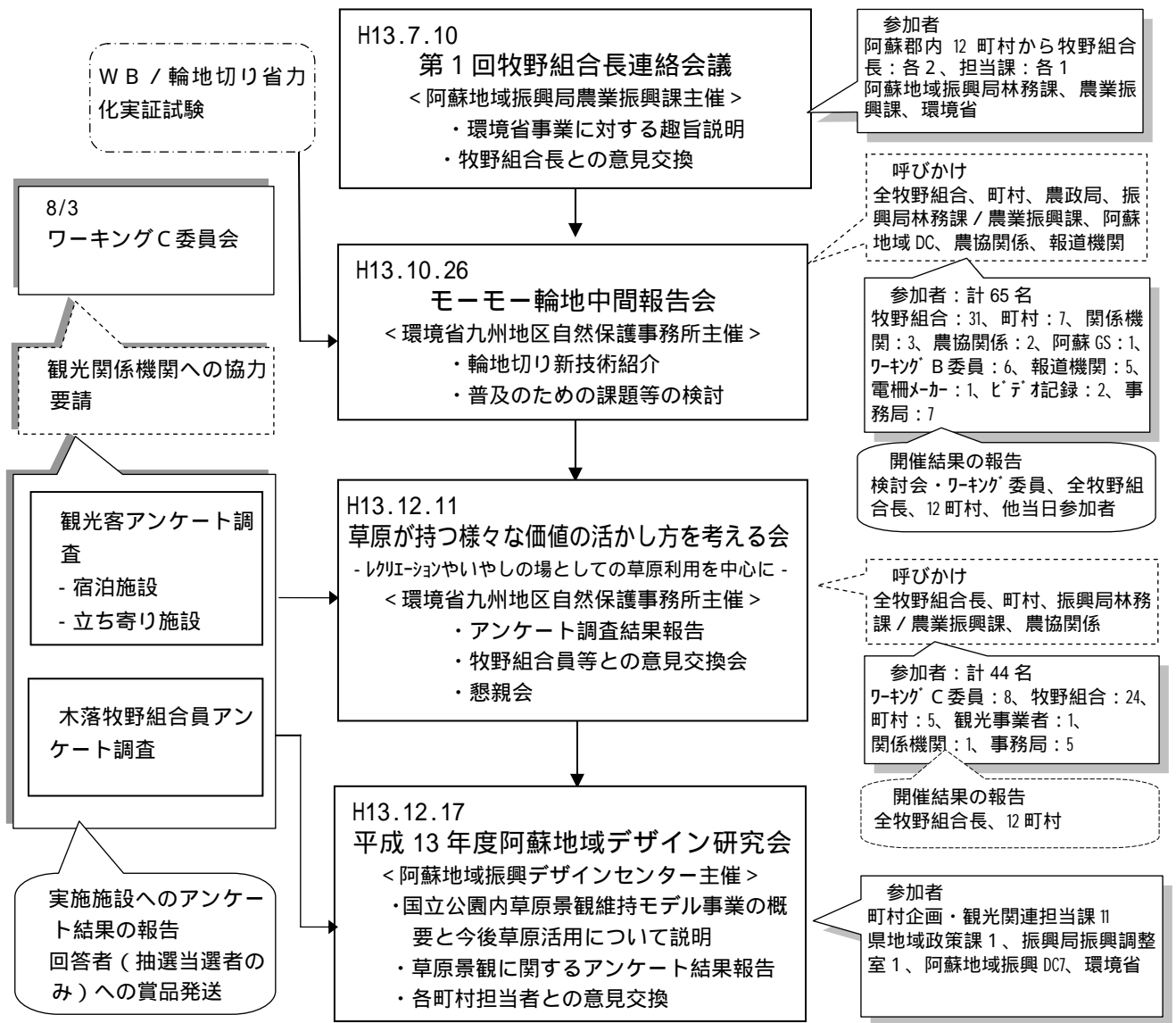


図 3 - 2 意見交換の経緯

## < 牧野組合との意見交換記録 >

- 「草原が持つ様々な価値の活かし方を考える会」を中心に -



注) 発言内容を以下の記号により発言者の種別に分けて掲載した。

: 牧野組合からの意見

: ワーキング委員、観光業者からの意見

: 事務局からの意見

### 阿蘇の草原の魅力について - 阿蘇の草原には尽きない魅力がある

#### 広大さに価値がある

阿蘇の草原は、雄大で地平線が見えるくらい草原が広がる世界にも希な景観だが、さらに、175もの牧野組合がそれぞれに維持管理している点に価値がある。

#### 古代のロマンにつながる魅力的なポイントがたくさんある

草千里や米塚などカルデラの中にあるポイント的な草原と、広々と続く外輪山の草原という2種類の草原があり、共通点は起伏があり深い谷があることで、魅力的で受け入れられやすい景観である。

南小国の押戸石山、高森の清栄山、西原村の一ノ峯周辺、冠ヶ岳周辺などに奇石があり、古代のロマンにつながるような魅力的なポイントが草原の中に沢山ある。

### 草原維持について

#### 1. 草原維持の基本は畜産振興

##### 牧野の活用による畜産振興で草原は守られていく

子供の頃は牛が多く、牧場全体がモーモー輪地状態だったが、現在、牧場はカヤで荒れている。牛が多ければ、畜産振興していくなれば、ある程度草地は守れると思う。

草原の良さは自分たちが一番良く知っているが、よその畜産農家も阿蘇の草原の活用に目を向けており、牧野の活用による畜産振興を進めていけば阿蘇の草原は守られていくと思う。

##### 土地利用の見直しなど総合的な対策が必要

畜産振興が一番大事だが、今の状況の中で畜産だけではだめ、ボランティアだけでもダメで、阿蘇全体の大きな面から考える必要がある。

植林地も木材にならないような所は焼いて野にする、ケヤキなどの雑木を植えて紅葉を楽しむなど、いかに草原を守るかということを考える必要がある。

必要な林地とそうでない所の見直しも含めて、守るべき草原をはっきりさせるということが進み始めているのではないか。

##### 野焼き・輪地切り省力化はマツタなし！ 省力化と安全性の面から対策を

高齢化は確実に進み、あと数年で野焼き、輪地切り問題を技術的にも行政的にも解決しな

ければならない状況にある。

昔は隣接する牧野が協力して野焼き作業をしていたが、現在は隣りの森林に火を入れたら大事になるため、しなくてよい所まで輪地切りをしなければならない。隣接する町村の協力で、同じ日に野焼きができるようにして頂きたい。

経験者でなければ輪地切りができないようなところは山の基盤整備をして便利に安全に輪地切り輪地焼きができるようにして、草原を守っていくことが一番大事だと思う。

## 2．住民自身が地域の良さを見直しを

自然が多く残る山奥の村は、都市の人々の憩いの場であり、子供達の教育の場

村に住む人々が普段何とも思っていない場所が都市住民にとっては大切な場所で、自然が多く残る山奥の村は子供達の教育の場であるということ、都市の人々との交流活動のなかで感じている。

地域に誇りを持ち、都市との交流を

自分たちの住む場所に誇りを持ち、心の豊かさが豊富にある場所であるという認識を高めること、阿蘇の人達が都市の人々に地域のことを知らせていくことが重要である。農産物を買って貰うことも人との繋がりの中でできてくる。住んでいる人達が自覚することにより、資源を活かした加工品づくりや草原にマッチした特産品づくりなど、生活をしていくための新しいものが生まれてくると思う。

## 3．都市との連携に向けた草原の開放について

草原の本当の良さを感ずると、草原維持に協力したくなる

観光客が草原に直接触れる機会をつくることは、牧野組合でも行動のルールや区域などが明確になれば良いという意見もあり、取り組みが可能な状況になってきている。草原の良さを本当に感じると草原維持のために何かしたいという気持ちが生まれてくる。

草原活用のため、馬で牧野の一部を乗り回すなど牧場を活用した観光が必要ではないか。

毎年子供達が草原歩きを体験

湯浦のキャンプ場に来る生徒達が、毎年大観峰に登り、私達の放牧地の中を通り下の七倉の滝まで歩いて出るということをしており、子供達には貴重な体験だろうと思う。

阿蘇に来る観光客はH12で1700万人、振興調整室では観光客とともに牧野を守っていくために、何らかの形で利用できないかということを探索中である。

ボランティア活動に対して草原の楽しみを

輪地切りや野焼きの参加者と牧野組合の人間関係の構築により、都市と農村との連携が具体化してくる。来年行われるモーモー輪地切りで、ボランティアが電柵のパトロールや草刈などをして、そこに農家側で楽しみを盛り込んでくれれば、お互いに受益するのではないか。

## 草原の多目的利用を考える

### 1．地域外の人々の草原保全への意識を高める

阿蘇の草原の現状について知ってもらうことが出発点

例えば、ハイキングや散策の場として牧野を開放して地元の人に案内をしてもらう、というようなことで草原を体験してもらうことが、草原保全の意識を広げていくために必要ではないか。その時には一定のルールづくりが必要で、場合によっては入場料などを頂き、パンフレットを配ることなどもできるのではないか。

## 2. 草原トレッキングの提案

### 阿蘇の草原を活かした質の高いトレッキングコースを

阿蘇の草原を使えば世界的なレベルで質の高いコースを作ることが可能である。見る場所を決めて景色を案内する、ポイントをストーリーで繋げていくと、時間を感じさせない歩き方ができる。自然や歴史などのガイドブックを作り、阿蘇を勉強しながら歩くという取り組みにより質の高いコースになり、体験を組み合わせると草原ツーリズムにもつなげていける。

### 牧野組合の協力で阿蘇ならではのツアーを

アメリカモンタナのサマーキャンプでは馬車で1週間位草原を巡り生活するコースがあるが、それに類似したことができるのは阿蘇の草原しかないだろう。

10~11月にかけてトレッキングツアーを実施した。2泊3日で大観峰、久住山、草千里周辺を歩くコースで、10回実施して多い時で20名以上が参加した。今後、協力して頂ける牧野があれば、草原体験により新しいトレッキングツアーができる。誰か突破口を開いていただければ草原の新しい活用の方向がでてくるのではないかと。

## 3. 利用のためのしくみづくりについて

### 草原体験を通して、地域にもメリットとなるしくみづくりを

草原の良さは、何らかの形で中に入らないとわからない。入った人達の体験を通してお金が返ってくるしくみを草原の中に持ち込むことは大事なポイントである。

### 草原を守りながら活性化を図るしくみづくりは地域の人々の連携から

自然を保護しながら地域を活性化させていくときに大事なことは、阿蘇は広大な草原が連続して見られることに価値があるので、皆さんがお互い手を握りあって、広大な草原の中でお金をとる方法と同時に使い道を明記して環境省と掛け合うとか、ラインを決めて税制を陳情することなどをして、実現する可能性は高いと思う。

## 4. 海外の事例

### 【オーストラリアにおける事例から】

#### 世界中の人に牧場体験してもらおうシステム

オーストラリアでも牧場が連なる風景は代表的な景観だが、後継者不足や畜産業の低迷により離農が増える中、何とか牧场景観を保っていかうという動きがある。あるグループが中心となって農家と契約を結び、世界各国の人々を農家にホームステイさせ、様々な体験を通じてオーストラリアの牧场景観の良さを認識してもらい、来訪者の喜ぶ姿をみて牧場の人々が自信を取り戻す、ということで政府から補助を引き出そうという運動を行っている。

#### 参加した牧場の噂により、さらに参加が進む

そこで大事なことは、必ずしも全ての牧場が参加しているわけではなく、参加した牧場の噂を聞きつつ参加する牧場が増えていっているということである。

### 【南米ガラパゴスのエコツーリズムの事例から】

#### 地域の自然や風景を守りながら地域にお金が落ちるしくみをつくる

エコツーリズムを最初に始めた南米ガラパゴス島では、島に飛行機が到着すると入り口で1人100ドル徴収し、それを自然保護局や海軍(密漁者対策)、地元の州などに割合を決めて配分し地域を運営している。

#### エコツーリズムの推進には5つの関係者の協力が必要

相互関係を強めながらやれるところから進め、成果を公表しあうことにより次に繋がっていく。地域を一番良く知る**地元の人達**がガイドになる。草原の科学的な守り方、伝え方など**研究者**の協力が重要。人材育成、ルールや仕組みづくりなどは**行政**が行う。地元の

ルールなど十分理解する**観光業者**の協力が必要。最後に**観光客**だが、阿蘇で観光客の6割がリピーターということは、阿蘇の景観が何度見ても飽きないということで意味が大きい。

#### 5. 受入側の要望 - 受入は可能だがルールが必要

##### ゴミ処理など来訪者のマナーを徹底してから交流を

都会の人に花や草原のことをもう少し教えてもらった方がいい。5月の青芽が出た一番美しい時、弁当のゴミなどをおいて帰る、車を原野に乗り入れるなど、それをなくしてから都会の人と交流するならいいが、それができていない。

ワラビ採りに来る人達に入場料を取りたいが、日本に一箇所くらいただの所があってもいいだろうと取らないでいる。ゴミ捨てに対して条例とか罰金の取り方とかを決めていただいたら、そのようにやりたいが。

##### 植物の乱獲が目立つ

都会の人が来て下さることは非常に嬉しいが、植物を不法に採っていくようでは困る。センブリなど昔はたくさんあったが、今はほとんど見当たらなくなった。

##### 草原の維持・管理に関して都会の人々に周知を・・・

草原は牧野組合の人々が野焼きなどをして守っているということが解っていない。誰かの土地だという認識が全くなく、そういう人たちには来てもらわなくてよい。

草原のことがわかってもらえるようなパンフレットを九州中に配ったら良くなるのではないか。

### 多様な人々の参加による草原保全

#### 1. 阿蘇のあか牛を食べて草原を守る

##### 今こそあか牛肉の良さをアピールしよう

「1kg 食べたら阿蘇の草原が 75 m<sup>2</sup>守れる」というキャッチフレーズで都会の人にあか牛肉を販売したら、一番喜んだのは老人ホームの方々だった。今こそ草原の草を食べたヘルシーなあか牛肉販売の開拓のチャンスである。

BSE問題で生産者は大変な状況だが、牛は草食動物であるという原点に立って畜産を再構築していくことが、草地畜産を見直す道を作りだしていくと考えている。

BSE問題で私達が20年やってきた粗飼料多給型の畜産が日の目を見始めている。阿蘇の草原を前面に出してあか牛を売る方向になりつつあり、行政とともに阿蘇のあか牛、草原牛の振興を行っていくチャンスである。他の地域から牛を預託したいとの希望も多く、これを機会に阿蘇の草原をアピールしていったら良いと思う。

牛肉問題では、生産者の顔が見える肉は売れているが、残念ながら国全体のシステムはそうはなっておらず、苦しい値段がつく状況になっているが、今、あか牛を買ってもらえれば、その良さを解ってもらえるという考え方もできると思う。

#### 2. 都市と阿蘇との連携を深める

##### 草原保全に向けて、過去9回のシンポジウムにおける方向性は都市と阿蘇との連携

阿蘇では過去9回草原に関するシンポジウムが行われ、大きな方向性として、阿蘇は6大河川の源であり230万の人々が依存しているという大きな視点に立ち、都市との連携により草原を守っていくべき、ということが確認されてきた。野焼き、輪地切りボランティアへの参加者は延べ700名に及ぶが、旅費や宿泊費を自分で払い体験した時の感動により阿蘇の草原を見る目が変わってくる。より多くの人に阿蘇の草原の理解者になってもらうことが大事である。

##### 教育上の面からも阿蘇の価値が見直されている

野焼きボランティアについては非常に関心が高く、また、修学旅行では今年1,400名が阿

蘇にファームスティをした。今後は教育上の面からも阿蘇の価値が見直されていくと思う。

### 3．多様な人々の参加による草原保全に向けて

#### 幅広い受益者からの負担も視野にいれ、草原を守らなければならない

阿蘇の草原から恩恵を受けている多様な人々の参加による新しい草原保全のしくみを作るためにも、草原が持つ役割について認識を深める作業が必要である。

阿蘇は6河川の源流域であり、230万人の受益者がいるということ。都市住民との連携により、税も含め、少しずつ負担していただきながら、草原を守り抜いていかなければならない時期にきている。

### 4．地域内の個々の取り組みから

#### 自分のできるところから進め、さらに相互の連携により広大な阿蘇の草原を守ろう

広大な草原を守るためには大勢の参加が必要だが、全ての人が意見を一致してから進めることは不可能で、やりたい人達が自分のできるところからやってみるのが大事である。そして、お互い成果を交換し合い、結果として広大な草原が守れるということをやって頂きたい。

#### 異分野の人々が話し合い、補いあっていくことが必要

草原の多面的な価値を認識し、活用していく方策も具体的に考えていかなければならないという段階に来ている。そのためには、こういう会議に異分野の人々が集まり、お互いの意見を聞きながら活用していくのが大事である。これを契機に行政、民間の方、業者の方が、お互いにないところを補完しあいながら取り組んでいかなければならないと思う。

### (3) フォーラム及び意見交換会における意見のまとめ

「阿蘇草原フォーラム 2000」及び各種意見交換会における意見のまとめは以下のとおりである。

#### 草原維持の基本は畜産振興

- 草原維持の基本は畜産振興という考えが共通認識であるが、畜産だけで守っていくことは困難であり、土地利用の見直しも含めた総合的な対策の必要性も認識されている。
- BSE問題で畜産農家は厳しい状況にあるが、今こそ草原の草を食べたヘルシーな草原牛の振興のチャンスであり、阿蘇の草原をアピールしていくことが期待されている。

#### 多様な人々の参加による草原保全に向けて

- そのためにも阿蘇の草原の理解者を増やすこと、税も含め幅広い受益者からの負担も視野に入れて、多様な人々の参加による草原保全のしくみを作っていくことが重要である。
- 地域外の人々の草原保全への参加・協力意識を高めるためには、阿蘇の草原の現状を知ってもらうことが出発点であり、そのために、ハイキングや散策の場として牧野を開放して草原を体験してもらうことが有効である。
- 一方で、住民自身が地域に誇りを持ち、都市との交流を進めていくことが重要である。

#### 都市との連携に向けた草原の多目的利用について

- 阿蘇の草原は全国一の規模を有し、古代のロマンにつながるような魅力的なポイントも多いことから、質の高いトレッキングコースとしての活用が期待されている。
- 観光業者によるトレッキングツアーの企画が動き始めており、広大な阿蘇ならではのトレッキングツアーを実現するため、牧野組合の協力が求められている。
- 牧野組合としては、草原の開放に対して理解を示すものの、ゴミや植物乱獲の問題発生を懸念しており、来訪者に対するマナー遵守の徹底、草原維持管理に関する認識の啓発を条件としている。
- 草原の多目的利用にあたっては、それが牧野組合等の地域にもメリットとなるしくみづくりや一定のルールづくりが重要である。

#### 草原の開放の可能性について

- 草原への立ち入りについては、行動ルールや立ち入り可能区域等を明確にすることで、ある程度、牧野組合側の受入が可能な状況になってきている。
- 野焼き・輪地切りボランティア活動参加者に対するお礼の意味で、草原をレクリエーションの場として開放するなど、お互いにメリットのある形も牧野組合側から提案された。

#### 地域内の個々の取り組みから推進し、結果的に広大な阿蘇の草原を守る

- 個々ができるところから進め、また、行政、民間、業者など異分野の人々が連携し、相互に補完しながら広大な阿蘇の草原保全に取り組んでいくことが必要である。

#### (4) 第5回全国草原シンポジウム・サミット in 阿蘇

全国草原サミットは、平成7年に大分県久住町で第1回目が開催された後、島根県太田市(平成9年)、北海道小清水町(平成12年)、山口県秋吉台(平成13年)と、草原を抱える地域に順次引き継がれ、これまで4回開催されてきた。

第5回目にあたる「全国草原シンポジウム・サミット in 阿蘇」は、草原地域を有する全国各地の自治体をはじめ郡内牧野関係者、環境保全団体、郡内外行政関係者、大学関係者などが一堂に会し、今後の草原維持に向けて、草原利活の活性化を中心としたシンポジウムを行った後、サミットにおいて阿蘇宣言を採択した。

環境省では、主催団体の一員として開催・運営に参加し、シンポジウムにおいては、講師として本事業の委員が多数参加したほか、阿蘇の草原景観維持についての認識を高めるため、ポスターセッションや資料配付により本事業の成果をアピールした。

#### 「第5回全国草原シンポジウム・サミット in 阿蘇」全体概要

##### 【開催趣旨】

全国一の規模を誇る阿蘇の広大な草原景観は、一千年に及ぶ放牧、採草、火入れの歴史が作り出した人類の遺産といわれている。そこは農林畜産業をはじめとする生業の場として、類まれな風景は人々の癒しの場として、また国土保全や流域に住む人々の大切な水源として重要な役割を担ってきた。

しかし近年、農山村における過疎・高齢化・農林畜産業構造の変化などの草原をとりまく様々な環境の変化により、その草原景観の維持が困難になってきている。このような状況で草原を維持管理し活性化するためには、課題や問題を把握し、セクション毎の活動をはじめ、組織の枠組みを超えて、地域がひとつとなり、新たな方向性を見出すことが必要である。

過去のサミットの成果を実行に移すため、草原利活用の活性化に取り組んでいる全国各地の自治体関係者及び研究者・NPO・市民グループだけでなく地元畜産農家、地元観光関係者などがパートナーシップを結び、草原利活用の活性化に向けた実践方法を模索すること目的に開催する。

開催日時：平成14年3月15日(金)～17日(日)

3月15日(金) 19:00～20:30 プレイベント

3月16日(土) 9:00～16:00 シンポジウム

16:15～18:00 サミット

18:00～20:00 交流会

3月17日(日) 9:00～13:00 アフターイベント

場所：阿蘇郡久木野村「グリーンピア南阿蘇」

主催：第5回全国草原シンポジウム・サミット実行委員会

参加者数：延べ524名(3日間)

- プレイベント 36名

- シンポジウム・サミット : 467名

スタッフ数：延べ150名(3日間)

## 開催内容

3月15日：イベント「映像で見る阿蘇の草原」-----参加者数：36名

講師：(財)阿蘇グリーンストック専務理事 / 山内康二

3月16日：シンポジウム・サミット -----参加者総数：467名

基調講演：

「阿蘇草原の復活に向けて - 草原の多目的価値と新しい活用の方向」

講師：近畿中国四国農業研究センター / 高橋佳孝

各地の報告：

「第2回草原シンポジウム・サミットが三瓶にもたらしたもの」

講師：高橋泰子 / 島根県太田市、「水と緑の連絡会議」代表

「復活した安家森かぬか平の林間放牧

- 短角牛によるふるさとの森の景観保全への取り組み」

講師：嘉村明美 / 岩手県岩泉町安家地区活性化推進協議会自然部会員

分科会

第1分科会：テーマ「草原の活用活性化への新しい取り組み」

講師：園田盡 / 木落牧野組合長 - 本事業ワーキング委員

山本嘉人 / 九州沖縄農業研究センター主任研究官 - 本事業ワーキング委員

第2分科会：テーマ「語ろう！このままじゃ牛もおらん 人もおらん！」

講師：徳野貞雄 / 熊本大学文学部教授

井 信行 / 元上田尻牧野組合長 - 本事業ワーキング委員

若井康彦 / 地域計画研究所長

第3分科会：テーマ「パートナーシップによる草原の維持」

講師：山内康二 / (財)阿蘇グリーンストック専務理事 - 本事業ワーキング委員

中川利美 / 熊本県畜産農業協同組合副組合長

第4分科会：テーマ「考えよう！草原の様々な機能と利用」

講師：松崎誠司郎 / 環境省自然保護局九州地区自然保護事務所長

小笠原徹朗 / 阿蘇町観光協会会長

第5分科会：テーマ「草原に対する行政の取り組み」

講師：高橋博人 / 九州農政局企画調整部企画調整課長 - 本事業ワーキング委員

浦田保憲 / 阿蘇地域振興局農業振興課草地畜産係長

山田朝夫 / 久住町理事兼企画調整課長

村中正義 / 山口県秋芳町観光商工課

分科会報告会：それぞれの分科会の報告、各講師のコメント。

座長：瀬田信哉 / 財団法人国立公園協会理事長

パネラー：分科会代表者

サミット

参加市町村：熊本県市町村長11名、熊本県外市町村長4名

交流会

3月17日アフターイベント / 野焼き研修会 -----参加者21名

### 【サミット宣言】

サミットには、草原地域を有する全国市町村から 15 市町村長が参加し、阿蘇宣言が採択された。内容は以下のとおりである。

#### 阿蘇宣言

1. 草原の維持・存続には、草原を活用した農林畜産業、草地酪農の一層の振興を図るとともに、地産地消費運動を繰り広げ、都市住民および消費者と農村の連携を強化しながら農村の活性化を進めます。
2. 草原は、森林とともに水源涵養、環境浄化などの機能を有し、水系の源となっています。草原の維持は流域全体の問題でもあることをアピールし、財政的支援を含めた草原維持のための理解と協力に取り組みます。
3. 野焼きの実施を担う牧野組合員等の高齢化や減少傾向が顕著になりはじめました。安全で効率的なモーモータン地切りなどの実証試験の結果を踏まえながら、一層の省力化を図るとともに、タン地切り野焼きボランティアへの参加・協力・支援について都市住民の理解を深めます。
4. 草原が持つ多面的な価値の評価について認識を深め、その重要性に着目して、景観の維持、希少動植物の保護管理体制の充実、さらに草原のツーリズム、バイオマス利用等への多面的利活用による草原活性化のために地域住民と都市住民および行政が連携し積極的な取り組みを展開します。
5. 本サミットの存続ならびに自治体および署団体の連携強化、また全国的な組織の拡充を図り、宣言内容の実現に全力であたります。

### 【ポスターセッションによる環境省の取り組みの紹介】

合意形成に向けたイベント開催の一環として、シンポジウム会場におけるポスターセッションに参加した。草原に関する認識を高めること、環境省モデル事業における草原景観維持に関する取り組みをアピールするため、4つのテーマで計 16 枚の展示を行うとともに、関連資料の配付を行った。なお、ポスターセッションには環境省の他、阿蘇郡内町村、次回サミット開催予定地から霧ヶ峰ネットワーク、東京農業大学などから出展があった。

#### < 展示内容 >

草原保全に向けた環境省の取り組み

ワーキング A 関連：阿蘇の草原の景観・希少種から見た重要地域について

同上パンフレット配布

ワーキング B 関連：モーモータン地実証試験中間報告

同上パンフレット配布

ワーキング C 関連：草原景観に関するアンケート調査結果

同上パンフレット配布

(展示内容は資料編参照)